

「地域子育てのハブから未来を育む」
～母・副園長・研究者－三つの視点が生む挑戦～
学校法人エンゼル学園 幼保連携型認定こども園
エンゼル幼稚園 勝見 慶子副園長に聞く



少子化や共働き世帯の増加で、子育て支援は「地域子育てのハブへ」。エンゼル学園は当行事業所内保育施設を運営し、働く世代と地域の持続性を支えます。博士号取得の専門性と現場経験を往復する勝見さんの言葉には、教育と経営を両立するヒントが満載。食育やICT教育などSDGsを意識した地域連携の取り組みにも注目です。

(聞き手：ひめぎん情報センター 副センター長 川久保公代)

【第1章】キャリアの歩み

川久保：これまでのキャリアや、印象に残っている転機を教えてください。

勝 見：大学・大学院で教育学を学び、海外留学を経て博士号を取得しました。テーマは「子どもとデジタル社会の関わり」。当時はまだ注目されていなかった幼児期のメディア教育を軸に、「子どもがよりよく育つために大人はどう関わるべきか」を研究しました。

大きな転機は母になったことです。日々成長する子どもと向き合う中で「研究と実践は切り離せない」と実感しました。園という現場は、教育学の知見を社会に還元できる場であり、研究者としても刺激を受けています。

川久保：留学や博士号の取得など、学び続けようと思ったのはなぜですか？

勝 見：現場に出る中で、子どもや家庭環境の急速な変化に危機感を覚えました。「このままではいけない」と感じ、学び直しを決意しました。28歳頃から「何を目指せばいいのか」迷い、はじめは防災教育、環境教育、メディア教育、国際教育など、教育の分野が多様化する中で迷いが続きました。しばらく模索しながら苦しい時期が続きましたが、その経験が研究への道を開きました。

川久保：研究で得た視点は、現場でどう生きていますか？

勝 見：以前は問題が起きても冷静に対処するのが難しかったのですが、研究を通じて客観的に整理・分析できるようになりました。「本当に大事なことは何か」「原因はどこか」を見極め、園として大切にしたい軸を持って判断できます。分析力を身につけ、理論を背景に問題の本質を説明できるようになったことで、保護者や子ども、スタッフにも感覚や経験だけでなくきちんと伝えられるようになり、仕事がより楽しくなりました。



【第2章】子育て支援の現場での気づき

川久保：現場で特に印象に残っている出来事や、支援の中で感じたことを教えてください。

勝 見：子どもたちの成長はもちろんですが、保護者の方の表情がふっとやわらぐ瞬間に強く心を動かされます。あるお母さまから「園に来ると安心する」と言っていたことがあります。園は単に「子どもを預ける場所」ではなく、それ以上に「子どもが学び、保護者も安心できる、親子の育ちの場所」なのだと感じました。研究の中で「子育ての過程で誰もがふと感じてしまう心細さや迷い」、そして「情報の多さによる戸惑い」に触れてきましたが、現場で聞く言葉はそれをより具体的に教えてくれます。この研究と現場の行き来が、私にとって大きな学びとなっています。

川久保：ある意味、保護者の方に対して教育するような側面もあるのでしょうか。

勝 見：そうです。ただ「教育する」というより、保護者の方と同じ目線で伴走していく感覚に近いです。例えば、ならし保育の2週間は、子どもだけでなく保護者の方にとっても新しいリズムに慣れていくための助走期間になります。時には「バス通園を試してみませんか？」と提案することもあります。家庭を取り巻く環境が大きく変化する中で、柔軟な対応が求められるようになりました。

川久保：支援する側もそのような環境変化に対応するには研究と実践の往復が欠かせないということですね。

勝 見：その通りです。全国的な状況を見ると、少子化や核家族化、生活の多様化、デジタル化などにより、子育てに求められることがこれまで以上に広がっていること

がわかります。研究を通じてその背景を知っているからこそ、現場で新しい課題に出合っても落ち着いて対応できます。学び続けることで、自分自身の支援のあり方もしなやかになってきたと感じます。

【第3章】社会の変化と支援の役割

川久保：少子化や共働き世帯の増加で、子育て支援の役割はどう変わってきたと思いますか？

勝 見：以前は「子どもを安全に預かる場所」としての役割が大きかったですが、今は「地域子育てのハブ」へと変化しています。親子だけでなく、地域全体で子どもを支える仕組みが必要になっています。保護者・地域・園が一体となり、未来を担う子どもたちを育むことが、これからの子育て支援のかたちだと思います。さきほど申し上げたように、子育てに求められることがこれまで以上に広がっています。家庭だけでも、また幼稚園でもすべてを教えきことは難しい。だからこそ、地域のさまざまな人が一緒になって子どもを育てる仕組みが必要です。例えば、小学校では「コミュニティスクール」という制度が始まり、地域の人が先生となって授業を行う取り組みが全国的に広がっています。地域全体で子どもを育てるという考え方は、これからますます重要になると思います。

【第4章】壁や課題の経験

川久保：女性として、働く中で壁や課題はありましたか？また、それをどのように乗り越えましたか？具体的なエピソードもお願いします。

勝 見：博士課程の研究、園の運営、子育て。この三つを同時に抱えた時期は本当に壁の連続でした。「もう辞めたい」と思ったこともあります。それでも「子どもに誇れる姿を見せたい」という思いと、仲間や家族の支えが原動力でした。「博士号を楽しみにしている」「あなたは希望の存在」と言われた時は心に響きました。研究仲間がミルクを飲ませてくれたり、姉が弁当を作ってくれたり、職場の先生たちも「学んだことを教えてほしい」と勉強会を設けてくれるなど、家族のような環境に助けられました。困難を知見に変える姿勢が、次の挑戦につながると信じています。

【第5章】価値観・こだわり

川久保：働くうえで大切にしている考え方や軸は何ですか？

勝 見：常に「子どもの最善の利益」を軸にしています。研究者としてはエビデンスに基づいた実践を重視し、現場では子どもの声や表情を見逃さない感性を大切にしています。データと感性、その両方を往復することで、教育はより確かなものになると思っています。子どもの笑顔や保護者の何気ない言葉の中にこそ、教育の根

拠と価値があると思っています。

川久保：現場において、その考え方や軸はどう生きていますか？

勝 見：私は「良い」と思ったことを感覚だけで判断しないようにしています。なぜ良いのかを説明できることが大切で、その裏付けとしてデータを確認します。数字だけに偏るのも危険ですが、感性だけに頼るのもいけません。両方を大事にすることが重要です。例えば、自分は良いと思わなくても、他の人たちは良いと感じていたということが、数字から見えてくることもあります。私はもともと情緒的なタイプで、若い頃は感覚だけで動き失敗することもありました。今は理論と感性のバランスを取りながら判断しています。

【第6章】経営者としての視点・地域とのつながり

川久保：支援の質を保ちながら、事業としての持続性はどう両立されていますか？

勝 見：理想だけでは続きません。だからこそ、地域の企業や大学、行政との協働を重視しています。例えば、県外や地元の企業さん、農家さんと連携した食育活動はその一例です。園児には学びの場となり、地域には経済や文化の循環を生みます。教育と経営は相反するものではなく、互いに支え合う関係だと考えています。

川久保：食育活動で地元や県外の方と連携されているそうですが、どんな取り組みですか？

勝 見：地元の味噌メーカーと一緒に、子どもたちと味噌作りをしました。園の周りにははだか麦の畑が広がっていますが、「これが味噌になるんだよ」「パンにもなるんだよ」と言っても、子どもたちにはなかなかイメージが湧きません。そこで、実際に味噌作りを体験してもらいました。最近は味噌離れが進んでいるので、子どもたちに味噌に親しんでほしいという思いがあります。松前町ははだか麦の産地なので、地元の食文化を知る良い機会になりました。そして味噌汁を食べる子も増えたと聞いています。

また、去年は茶摘み体験もしました。茶畑を持つ方にご協力いただき、子どもたちが摘むことで食材への関心が高まったと感じています。

川久保：地域との関係づくりで意識していることがあれば教えてください。

勝 見：園は「地域の交差点」でありたいと思っています。保護者や地域の声から多くの取り組みが生まれました。たとえば、スマホの適切な使い方をテーマに、保護者、教育委員会、ICT教育専門機関と協力して講演や教材をつくったりもしました。地域が園を必要としてくれる限り、園も地域の力を活かしながら成長していきたい。その相互関係こそが、園を強くしていると思います。



【第7章】人材育成について

川久保：スタッフを育てるうえで大切にしていることを教えてください。

勝 見：スタッフには「自分の保育観を育ててほしい」と伝えています。正解を与えるのではなく、一緒に考え、悩み、学ぶ姿勢を大切にしています。その積み重ねが子どもの安心につながり、園全体の文化を豊かにします。安心して挑戦できる場があることで、保育者は輝き、その姿は子どもや保護者にも必ず伝わると思っています。

川久保：具体的にはどんな取り組みですか？

勝 見：以前は、私もそうでしたが、「決まったことをやる」ことに精一杯でしたが、今は多くのスタッフが自分で考えて動けるようになってきていると感じています。例えば、「この子にはこれが必要だと思ったので、こうしました」という報告を聞くと成長を感じます。そのために「まず自分で考えてみて」という習慣をつけています。さらに、自分の行動を言語化することも意識しています。「私はこういう気持ちでこうしている」「本当のルールはこうだけど、この子にはこう変える」と実況中継のように説明することで、考え方を共有しています。

【第8章】ワークライフバランス

川久保：仕事と家庭を両立するために、意識していることや工夫していることはありますか？

勝 見：私は「バランス」より「循環」という言葉を使います。家庭での経験が園に活き、園での実践が研究につながり、研究成果が地域に還元される。その循環があるから、どの役割も大切にできます。母親、副園長、研究者、どれもが欠かせない「私自身」です。

私にとっては「バランスを取る」というより、「やりたいことをやるために工夫する」という感覚です。私の家は園長先生も含めて、生活と仕事が完全に一体化しています。旅行に行っても「これ教材に使えるね」「これ50個買おう」となるのです。園長先生も同じで、いつも「保育にどう生かせるか」を考えていました。どこに行っても、「この仕掛けは保育に使えるね」「この衣装は参考になりそうだね」と考えていました。どこで良い出会いがあるかわからないから、常にアンテナを張っておくようにと教えられ、それが染みついています。例えば「どんぐり拾い」に出かけても、実は作品展の材料集めも兼ねている。そういう発想が自然になっています。

川久保：どこで何をしていても、それが仕事にもつながるのですね。

勝 見：そうです。「仕事をしながら楽しむ」「楽しみながら仕事をする」と、ストレスがなくなると教えられました。当時は意味がわかりませんでした。今はよくわかります。今度、園長先生が孫と一緒にテーマパークに行きます。「仕入れに行こうかな」と言っていて、発表会の衣装や園内の装飾の参考にするそうです。クリ

スマスの飾りもそうやって学んでいます。もちろん孫との思い出も作ります。だから一石二鳥、三鳥、いや四鳥くらいの感覚です。

【第9章】若い世代へのメッセージ

川久保：社会で活躍する若い世代、特に女性たちにメッセージをお願いします。

勝 見：キャリアと家庭、研究と子育て—どちらかを選ばなくてはならないと思う必要はありません。むしろ両方を抱えることで見える景色があります。社会がまだ十分に柔らかくない中で挑戦するのは大変ですが、その一歩が次の世代への道を拓きます。自分一人で抱え込まず、仲間や地域とつながりながら、自分らしいキャリアを編んでいってほしいと願っています。

川久保：「どちらかを選ばないといけないわけではない」という言葉が印象的です。それぞれの立場で見える景色が違うということですね。

勝 見：本当にそう思います。とにかく、まず一歩を踏み出してみることに。そうしないと、この厳しい時代は乗り越えられません。

SNSを見ると、すごい人がたくさんいます。「3人の子どもの育てながら部長職、ワンオペで、いいマンションに住んでいて、習い事も完璧」なんて投稿を見ると、正直へこみます。「私、全然できてない」と思ってしまう。でも、そういう情報に振り回されないことが大事です。お母さんたちも「仕事に復帰しないといけないけど、前みたいにはできない」と悩んでいます。だからこそ、周りを巻き込みながら進むことが必要です。

川久保：今日は素敵なお話をありがとうございました。

勝 見：こちらこそ、ありがとうございました。



【プロフィール】

愛媛県松前町出身。

玉川大学文学部卒業後、ルイジアナ州立大学大学院、鳴門教育大学大学院、

兵庫教育大学大学院にて教育学を専攻し、博士号（学校教育学）を取得。

大学および研究機関で幼児教育・学習環境・ICT活用を中心とした教育研究に従事したのち、

令和5年より、学校法人エンゼル学園認定こども園エンゼル幼稚園 副園長として、

幼保連携型認定こども園エンゼル幼稚園の運営に携わる。

幼児教育の質向上、ICTを活用した保育改革、

地域と連携した食育・国際教育（ユネスコスクール）など、多領域で実践と研究を展開。

講演・研修・大学院での授業も担当し、「現場と研究をつなぐ」教育リーダーとして活動している。

趣味はピアノ、旅行、おいしいコーヒー探し。